

神を喰らいし暴食の竜
を宿した者

クビア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何不自由なく過ごしていたはずが、その日常は突然崩壊する
悪意、エゴによりいつもの日常を失った彼はどう生きるのか

目次

1 0 話	9 話	8 話	第 7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
37	34	29	25	21	18	15	10	5	1

1話

俺の名前は、ことのは琴葉しやう匠 16歳 高校2年だ

ここ最近、可笑しな夢を見続けている

己が緑のゴツゴツとした巨大な竜になる夢である

とある地にて、その竜は目覚める。

それと同時に感じる強大な餓え、目前に広がる広大な大地、多くの動植物……
素晴喰らいたいらしい

その考えに従うがごとく、次々に視界に入る生きとし生けるモノを喰らい尽くす。

獣を……草木を……人を……悪魔を……天使を……同族の竜を……

そして、ついに竜は喰らった

神でさえも

その後は喰らった者たちの同胞が敵討ちをすべく現れ、光を集めた槍や何やら魔術により生み出された火・氷・雷など、さらには兵装した人が捨て身で爆弾を抱え突っ込んでくる

これを3日3晩戦い満身創痍のところ毎回目覚める

そんな事にも慣れてきたこの頃は特に考えず、普段通りの日常を過ごしていたこの時点では、後日あんなことが起こるとは思ってもいなかった。

〈冥界〉

とある屋敷にて、屋敷の主である男が嬉しそうに部下の調べた資料を見ていた。

「遂に見つけたぞ、この餓鬼が化物を封印した神器、いや完成された神滅具コロージュンギア暴食竜の外套の宿主だ」

悪魔社会は階級で差別されており、この男は中でも上位階級の貴族である。

そんな男が眷属である者たちにそんなことを話していた。

「あの時代の老害共は危険視ばかりしているが、こんな強力な力さえあればこの私の評価は鰻登り。さらに、天使や墮天使共なんぞに最強である悪魔が遅れを取ることもないだろう」

「その通りでございます、主様。では早速、その餓鬼をお連れ致しましょう。」

1人の眷属悪魔がそう告げ数人が退室する。それを見届けた貴族悪魔は高笑いをし、眷属が戻るのを楽しみに待つことにした。

己が現魔王である者どもより高位に立つことも夢ではない。そう確信を持ち、まだかまだかと機嫌よくしていた。

しかし、いくら待てども眷属が戻らない事はおろか連絡さえ来ないことに疑問を持ち始め、残っていた他の眷属と共に向かうことにした。



2話

オッス、俺の名は兵藤一誠。高校2年、17歳だ

好きなモノは、エロいもの。特に女性の胸部、つまりおっぱいだ

今日も今日とで我が同志の松田&元浜と共に女子更衣室を覗きに行く任務に向かう

「お二方、このスポットはな。代々先輩方から受け継がれてきた隠し場なんだ」

「松田、最高の場所だな。あの先に俺たちの桃源郷がひろがってやがるんだ。これは」

「覗くしかないだろ!!」

『そこにいるのは誰!?!』

三人の興奮を抑えきれず揃えた叫びに更衣室の女子が反応をする

それから始まる毎度恒例の変態三人衆討伐、通称〈またか〉

ほぼ毎日行われているため、口をそろえて言われる眩きがそのまま使われている

「おいおい、まだ覗いてすらいないぞ。お前たちが声を大きくするから」

「お前もだ、イツセー!!」

「おいあそこにいるのは!? おい、琴葉! 助けてくれ」

逃げる先にいたのは、そこそこイケメンに入る同じクラスの琴葉だった。

「またやったのかよ、お前たちは」

あの野郎ため息までつけて言いやがった。お前みたいに行けてないんだよ俺らはな

「まあ、助けてやってもいいが………もう手遅れだな」

「「え?」」

ガシッ

『あんた達、捕まえたわよ』

振り返ると既に追いついてきていた陸上部の生徒が制服をがっしりと掴んでいた

.

「あいつらもバカなことばつかするな。イツセーは黙つてれば顔は悪くないし、松田はスポーツマンに行けばいいし、元浜に関しては勉強は上位何にな」

帰宅部の俺は家への帰路を進みながらそんなことを呟く

今頃、続いてきた女子にボコス力蹴りを入れられてたから当分動けないだろう

「そういえば、イツセーを見た時に何か違和感があったが何だったんだ？最近の夢とい訳が分からんな」

愚痴を溢している内に家の前まで着いた

「ただいm・・・なんだ？この違和感・・・ 母さん？沙希？大智？」

家に入った瞬間にあり得ない感覚が襲う

自分の家のはずなのに違うような、体が拒否するような、理解しがたいものがあるような、そんな感覚が

そのまま本能なのか拒絶するのを無視しつつ、リビングの扉を開くとそこには

血まみれの母と隅で抱き合う妹弟、それを笑いながら見ている可笑しな男3人

「おやおや、お早い帰りだな。これから君の妹弟で遊びとこだったんだが」

「まあ、ターゲツトが帰ってきたからいい」

「こんな餓鬼が本当に伝説のあれなのか？」

そんなことを言っていたが、俺は

「……………母さん、冗談だよな？演技だよな？なあ、… 答えてくれよ」

しかし母からは何の返答も返ってこない

本当に死んでしまったのか……………何の親孝行も出来ないじゃないか……………親父が死んだ後1人で3人を養ってくれた母が死んだ……………

3話

母さんの死んだ姿を見て目の前にいる男たちへの殺意を抱く中、俺は奥底に眠っていた。ただろう力を身に纏った。

今まで違和感があった。

あの何度も見えてきた不可解な夢。妙にしっくりくるこの力

あの夢を見始めた頃から感じ始めた異常な食欲・満たされない空腹感

そして、今この瞬間すべてがただの獲物としか見えないこの感覚

「これが主の言っていた神器か。思ったよりも普通だな」

「まあ、これの回収が今回の目的だ。さっさとおわらせるぞ」

言い終わる寸前、男の頭が消えた。

もう一人が後ろを見るとそこには無くなった相方の頭を片手にどす黒い瘴気にも似たものを纏った匠の姿だった

男は殺しても構わないため、すぐに匠に向かつて攻撃を仕掛けるが、避けられ肘で腹部を撃たれる。

「人間の非力な力で悪魔であるこの俺にそんなものが効くものか」

さらに、攻撃を繰り返すがすべてカウンターの要領で打撃又は上手くいなしていく。時間が経つごとに、男の息は上がっていく。

それと共に謎の気怠さ、魔力を使つたわけでもないのに込められない魔力、先ほどまで効かなかつた人間の打撃が己に効きだしたこと

様々なことが男の精神を蝕んでいく。

そんな最中、今まで淡々と何も語らず攻撃をしていた匠が口を開いた。

「母さんを殺したお前たちはどんなことがあるかと殺す。お前の後はお前たちの主とやらに

報復しに行くとするよ。だから、手間を掛けさせずにさっさと死んでくれ。」

男が顔を上げた最後に見たのは赤黒い線の入った大きな刀を振り下ろす匠であった。

（冥界）

「おかしいぞ。そろそろ目的の人間を連れて戻ってきてもいい時間ではないか。」

送り出した眷属がいつまで経っても戻ってこないことに違和感を感じ始めた貴族悪魔は残りの眷属を集め

「数時間前に送り出した者が戻って来ぬ。これより現地に様子を見に行く。付いてこい」

眷属を引き連れ、人間界に向かう。己が眷属もろとも死ぬやもしれぬ運命を知らず

く駒王学園 旧校舎く

「あなた達、この強大な力に覚えはある？」

この土地を管理する者であるリアス・グレモリーは眷属であるイツセー達にそう問う
「いえ、このような力は感じたこともないですわ。」

「僕もこんなことは初めてです」

「……同じくわかりません」

朱乃、祐斗、小猫はそう答える

そんな中、イツセーだけが何か考え込んでいる。

「どうかしたのかしら、イツセー？何やら考え込んでいる様だけど」

「ああ、いえ。この力の方角が俺のクラスメイトの家の方角と一致してて、もしかすると
」

イツセーはその考えの理由として

- ・ 悪魔になった自分を平然とKOできること
 - ・ 前にはほかの悪魔らしき奴が琴葉をつけていたこと
 - ・ 前に変な夢を見るようになったことを聞いたこと
- などを挙げた

「そうね、そのつけていた悪魔が気になるところだけど……それよりも変な夢っていうのは具体的には聞いたのかしら」

「はい、なんとというか巨大な竜になって周りにいる生き物や無機物まで食べ続けて、よくわからないうちにもものすごい量の人や多分天使・悪魔と何日も戦うとか言っていました。」

「そう……取り合えずこの力の発生源に向かってみましょう。何かわかるかもしてないわ」

「「はい、部長」」

向かう先に起こる悲惨な光景を知らぬまま、リアスの先導の元、彼女らは発生源に向かうのだった。

4 話

最後の男が匠の振り下ろした太刀で両断された。

そしてその場にいるのは、怯えたまま部屋の間で抱き合う妹弟とその傍に殺された母親、男達の五体不満足の死体を足元に転がす返り血で赤黒く染めあがった外套を纏う匠であった。

「これはどういうことだ!? 私の下僕が死んでいるだと!」

戦っている際に割れた庭の扉から貴族らしき男とその従者らしき者が4人ほど入ってきた。

そして、驚愕から怒りへ表情が変わっていき、

「餓鬼を1人連れてくるだけの簡単なことさえもできんのか。このゴミ共め!!」
などと死んだ従者に対して声を荒げ叫ぶ

「主様、死んだこの者のことは捨て置き、目的を遂行いたしましょう」

「ここは我らがこの餓鬼を連れて参りませう」は ドシツドシツ

従者が言い終わる前に後ろに控えていた従者2人の頭部が消え去った。

「……なんだと?」

貴族の男が突然の事態に怒りで歪めていた顔から抜けた声で呟いた

「次はお前達か。母さんの仇なんだ。生きては帰さん」

そんな声に唾然としたまま、そちらの方を向くと

そこには赤黒い銃のような形状のモノを向けている匠の姿があり、唾然として動かない貴族に向け、

さらに発砲するが寸前に正気に戻った従者が貴族を庇い右腕を撃ち抜かれ、腕を失い肩を抑えている従者に追撃として双剣に持ち替え首を落とした

「庇わなければ死ななかつたものなのにな、まあいい。死んだお前らの力は俺が貰い受けよう」

” corrosion ” ” corrosion ” ” corrosion ” ” corrosion ” ”

匠はどうでも良さそうに呟き、二の腕のプレートから連続で能力が発動される

それと同時に死んだ従者たちから黒いモヤが発生し死体が消えていく

「我が血肉となりて、うぬらの主を滅ぼそうではないか」

「馬鹿な！こやつは死んだ者を喰らっておるのか」

「この外套が使い方を教えてくれたんだよ。足元に転がっているモノを喰えつてな」

死体をもモヤになり神器に吸収されていくにつれ、匠の語彙が荒くなる

残っている眷属の男2人が貴族の前に庇うかのように立つ

「主よ、お逃げ下さい。ここは我らが食い止めます」

「我らの命は主の為に」

従者が決死の覚悟で主を逃げるように促し、その忠誠に答え逃げる主
「私、ヴェルサー・オロバスが命ずる。私が逃げるまで食い止めよ。

今までご苦勞であつた。」

そう言い残し、ヴェルサーは入ってきた扉から出て行つた

「……ここが我らの墓場だな」

「……あの方が逃げ切るまで耐えきるぞ」

「イツセー、あとののくらいで彼の家に着くのかしら?」

「ここだとあと10分ぐらいでアイツの家です」

転移でなく走つて、匠の家に向かうリアス達はさらに強くなつた気配に焦りを感じつ
つ近づいていた

5話

リアスら一行が匠の家まで後少しという時、曲がり角から眷属に逃がされたヴェルサーが慌てた様子で飛び出してきた。

「貴方はオロバス家の次期当主のヴェルサー卿!!なんでこんな所にいらっしやるのですか?」

「グレモリー家のリアス嬢!早く逃げなければ、眷属諸共奴に:!?もう来たのか!」

ヴェルサーが振り向きながら、そう叫ぶ。リアス達もそれに吊られてそちらを見ると、外套を纏ったまま歩んでくる匠の姿があつた、

「琴葉（匠君・琴葉先輩・琴葉君）!!」

「増援か……まあいいか。まとめて殺せば変わらん」

匠は顔見知りである筈のリアス達に気づかず、そう言い切る。

「あれは暴食竜の外套!!彼がああ神滅具の持ち主だったなんて!」

「そんなにヤバイ神器なんですか?」

「ヤバイも何もあの神器に封印された竜は、実際に神を殺しているんだよ。イツセイ君の持つ赤龍帝の籠手よりもさらに凶悪な神滅具になるんだ」

「それに宿主となった者の中には飢餓感によつてその者住んでいた集落の住民すべてを殺し尽くして喰べたらしいわ」

木場とリアスの言葉で友人である匠の神器の凶悪さがよくわかった一誠。しかし腑に落ちないことがあった

「そのの貴族悪魔を追つてきたつてことは、あいつがあんな風になつた原因を知つてゐるつてことですよね」

「…そうね。ヴェルサー卿、こうなつたのはどうしてなのかしら？」

リアスの問いにヴェルサーは気まずそうに顔を背け、

「奴の神器のことを知り、ほかの貴族に越される前に手に入れて飼ひ慣らそうとしたのだ。結果、眷属は全滅し、私も追い詰められている状態だ」

「そんだけならあんなにならないだろ？あそこまで敵対してくるつてことは何をしたんだよ、アンタ」

「眷属に奴の親を洗脳しておくように命じていたが、何らかのミスで殺してしまつていたらしい。」

その眷属は私が生きた時にはすでに殺されていたよ」

ヴェルサーの答えにリアスは啞然とした。

悪魔全体としての認識であるの神器は、見つけ次第に即報告、なおかつ手を出さないこ

とが取り決められていた。

さらに、もし接触する又は眷属交渉する場合、魔王への事前報告を義務づけられてもいる。

「貴方の行ったことに対して、言いたいことは山ほどあるのだけれど、まずは彼をどうにかしない？」

「部長危ない！」《グシャツ》…え？」

リアスが言い切る前に小猫がリアスを引つ張ったと同時にヴェルサーの首が宙へ舞った

突然の引つ張られたことと目の前で首が飛んだこともあり、数瞬リアスは思考が止まったが、すぐに思考を戻し前を向くと先程は持っていなかったはずの大きな刀を持った匠がそれを振り抜いていた

「まだ間合いが掴めないな、上手く避けられて当たったのはそいつ一人だけか……」

匠はリアスらの方を向き、‘次はお前らだ’と言いたげな表情で其方を睨んだ。

6 話

首を刈り取られ、力なく倒れたヴェルサーからリアス達の方へ狙いを変えた匠は

何の躊躇なくその手に持った太刀で斬りつける。それをギリギリ避けるリアスと小

猫

「危ないわね。こちらに敵対する気はないわ」

「お前たちもこいつの仲間なんだから。ならここで死んで行け」

リアス達の言い分なぞ知らぬという態度でさらに追撃をするが、それは木場によって阻まれる

「待ってくれ！部長も僕らもその男がこの町に来ていることを知らなかったんだ」

「琴葉、俺たちはお前の家の方から強力な力の波動を感じてきたんだ」

木場とイツセーの言葉を聞いたが

「だから、母親を殺されたこの怒りを治めろとでもいうのか!?俺は止まる気はないぞ、貴様ら悪魔のすべてを殺し尽くすまでは」

阻まれたままであった太刀に力をさらに込め、木場は堪えるが少しずつ押されていき

膝をつく

このままでは木場が斬られてしまうと、イツセーは自らの神器を出し

匠に殴りかかるが、太刀を呆気なく手放し避ける。

「そんなに簡単に武器を手放してもよかつたのか？こつちとしては戦わなくてよくなるからいいが」

イツセーはそう語りかけるが、落ちた太刀が霧散する。

そして、さつきと違い双剣を構えた匠が立っていた

「いくら武器を手放したとしても、油断したのは命取り立ったな」

体勢を屈め、突つ込む姿勢になり、その場にいた全員が「来る!？」と身構えた

しかし、それは匠の後方からの声と衝撃により、匠は動きを止めた

「お兄ちゃん、もうやめて！この人たちに当たっても、いくら殺したとしてもお母さんは帰ってこないんだよ」

「それにお兄ちゃんのそんな姿見たくない!」

それは匠の妹弟、沙希と大智2人からの叫びだった

二人とも母親が目の前で殺され、恐怖で震えているが

それでも、いつも優しく笑っている兄が行く場のない怒りに身を任せ、暴れていることが

どうしても我慢できなかつた。

「お兄ちゃんがこんな事をしたとしてもお母さんは喜ばないよ」

「自分のせいでお兄ちゃんが体も心も傷ついて、苦しんでるのを悲しむよ」

そんな2人の叫びに怒りで思考の鈍っていた匠も漸くしつかりと今の現状を理解できた

「・・・私達は貴方に何もするつもりはないわ。もちろん、妹さん達にもね」

リアスはやつとまともに話せるようになった匠にそう語り掛けた。

「・・・・・・・・グレモリー先輩、それに皆さんご迷惑をお掛けしました。

やつと感情が落ち着きました」

先程まで手にしていた双剣も霧散し、外套もすでに解除されている

「いいえ、貴方の気持ちを考えてと分からないこともないわ。そちらの妹さん達には感謝するわ。

あのまま貴方と戦っていたら、どうなっていたか・・・」

「少なくとも私たちも彼もただでは済んでなかったと思いますわ」

「確かにそうでしょうね。現にあと少し一誠君が遅かったら、押し切られて斬られていたね」

「ひとまず琴葉君：だったわね。貴方たち兄弟の家に行きましょう。荒れているだろう

し、その……3人の母親を弔わないといけないわ」

第7話

正氣に戻り、外套を解除した匠は妹たちとリアスらを連れ、荒れた家へと帰ってきた。
「ここがあなたの家なのね」

ヴェルサーの眷属の結界により周りの住人からは何の問題のない普通の家に見てる
が

一歩立ち入るとそこには、割れた窓・ガラス、罅の入った壁、血の匂いの嘔せる不快
臭

「・・・はい」

匠や妹たちは戻ってきて、これが現実であることを、母親の死を再認識していた。

「先輩方、ひとまず話は明日以降にお願いします。ここの片付けと母の弔いをしなければならぬので」

匠がリアスらにそう声を掛けた。その際に、リアスは見逃していなかった

匠の無理をして弱音を・・・今すぐにも泣きだしてしまいそうな悲しみを兄弟の一番上であるが故に抑えていることを、今でも悪魔に報復したいという気持ちを恐怖を堪え止めに來た妹たちが居るが故に耐えていることも

「……わかったわ。今日は私たちは帰るとします。後日、誰か使いを出すわ」
「……ありがとうございます」

「部長！なんでアイツの家の片付けを手伝うことや慰めをしないんですか!!」

部室に転移で戻ってきたリアスは一誠の一言から始まった

「あの場に悪魔である私たちが居ることが、今の彼に負担をかけるからよ」

リアスはそう伏目がちに答えた

「今の彼ら兄弟は悪魔に母親を殺されて時間がたつてないのよ。それに彼は下の子達の手前抑えていたけれど、まだ悪魔に対する殺意も何もかもが消えてないの」

「……琴葉先輩との別れ際に見えた顔には複雑な感情が現れてました。」

「きつと気持ちの整理がつかないんだね」

小猫と木場もそういう

「リアス、ひとまずこの事を魔王様に連絡を入れるべきでは？」

「そうね、この事は報告しておくわ。今日は解散にしましょう」
それを合図に活動は終了し、各自家へと戻った

それから4日琴葉は学校に来なかつた

先生からは家が強盗に襲われ、母親が子供を護つたが無事だつたが母親は当たり所が悪く即死であつたらしい

これには警察も関わっているらしいが、先輩からは上手く暗示をかけ改竄したとのことである

普段であればすべての住人から存在を消してしまうとのことだが、今回は魔王直々の指示で

架空の事件になつたようだ。

4日で家の片付けや葬儀の手配が終わつたが、母さんが殺された夜から俺は、沙希と大智にはバレないようにしているが、絶え間ない飢餓感と猛烈な殺意がこの身に雪崩れ

込んできている。

殺意はどうかなるが、飢餓感だけはどうにもできない

2人を寝かせてから夜食を食べなくては気が狂ってしまいそうになる

二人には親戚の伯父さんに頼んである。俺は、この神器に溺れないようにこれを知っていくためここから離れるつもりだ

8話

一誠4日ぶりに登校してきた琴葉の奴は、まるで別人のような雰囲気が出ていた。でも、周りの奴らは何事もなかったかのように不幸を慰める言葉をかけるだけで雰囲気を感じするものはいない。

「……この数日で何があったんだ？」

そんな事を独り言で零し、部長に言われていたことを思い出し、アイツに話しかける「琴葉、部長がこの前の件で今日の放課後に話せるか？ って言われたん「わかった」……なら伝えとくぜ」

俺は返答を聞いて、琴葉の席から離れ

部長に了解を得たことを伝えた

放課後

「琴葉、準備はできてるか？」

「既に終わってる。行くなら行くぞ」

琴葉がカバンを持って先に教室を出た為、俺も急いでカバンを取り追いかけた。

旧校舎に部室があることは伝えていたので、特に問題なく連れてくることをできた。だが、ついこの間親を、しかも片親で育ててくれていた母親を

殺されたばかりであるのに、その仇である悪魔の拠点に来ては大丈夫なのか心配になる

「兵藤「イツセーでいいぜ」・・・なら俺も下の名前でもいい。4日前のことは、お前の気にすることじゃないぞ」

匠の言葉で俺はドキッとした。俺がその事を考えていたことを察したのだろう。

「確かにまだ怒りや恨みの感情はある。だが、それをむやみやたらに誰かに当たるともりはない」

朝から感じていた違和感はこの事を悟っていたから、敵意や殺意など感じる筈のものを感じなかったからだだったのか。とイツセーは分かった

話をしながら旧校舎に入り、部室の扉の前までついた。

自分の部活の部室ながら、やはりこの扉は

「えらく悪趣味な扉だな。いかにもオカルト感が出ているな」

匠も同じ意見のようだ

「他の部員も来てるはずだ。入ろうぜ」

イツセーの先導で部室に入った

既にリアスや朱乃は来ており、木場は紅茶を飲み、小猫はお菓子を黙々と食べている「待っていたわ。琴葉君。先日、話せなかったから今日は来てもらったの」

「約束ですので、……………それで知りたいことは何ですか？」

「あの日に私たちと会うまでに何があつたかね。そして、今後どうやって生きていくかね。妹さんや弟君がいるみたいだし、今後あの子らを貴方に巻き込まないようにしなければならぬでしょ」

あの日、匠が俺たちの前に現れてから今の今まで部長は匠のことを心配していたようだ

自身の種族の中でも貴族と言われる者に親を殺されたのだ。怒りや恨みがあるのだろうか。と考えるだろう。

しかし、怒りも敵意もなく、匠は部長の問いに対し答えていく

家に帰った際にいつもと違う雰囲気を感じ、リビングに向かうとそこで母親が死んでおり、そこにヴェルサーの眷属が3人立っていたこと。そこから体の奥からあふれる憎悪と怒りに身を任せ、眠っていただろう神器を使い眷属らを全滅させ、ヴェルサーを追いかけた末にリアスらにあつたこと。

「・・・そうだったのね。このことに関しては私からは謝罪しかできないわ。私も部員もヴェルサーと同じ悪魔なの」

「ある程度予想はしていました。それに神器の記憶なのか、夢で見た悪魔、天使、墮天使、神など色々な種族が居ることに確信が持てました。」

リアスはあの日の夜に俺の言っていたことを思い出したのだろう。

「それは巨大な深緑の竜になるって夢の事かしら？」

匠はそれに頷き肯定した。

「2年にながたったぐらいからですね。その夢を見るようになったのと満たされない空腹感を感じるようになったのは」

「そうなのね。あと、今後どうしていくのかしら？下に2人いるのでしよう」

「2人は親戚に預けました。そこは退魔を生業としている人が多くいる土地ですし、その地の伝説では邪なるものを滅する神の加護があるらしいので。」

俺は2日前に夢に干渉してきた人に会いに行く予定です」

「その人物はだれかわかっているの？」

「名乗りはしませんでしたが、数か所の指定された場所に行けばわかると言われました。」

行く場所が海外である為、これより数週間登校しないことが分かったため、学校に根回しをして留学と親戚に会いに行くということにしてもらうことになった

この後も色々な事を話し、リアスは魔王より受けていた指示通りに匠への謝罪の証として

有事の際に協力をすることを伝えた

そこで匠は部室を後にし、リアスらは疲れたようにソファーや椅子に深くもたれかかった。

9話

先日、オカルト研究部の部室を後、学校へは海外の親の知り合いに会いに行くことと2か月の休学することを伝え、家に帰り、必要となる物をまとめ、翌日早朝より最寄りの駅から飛行場へ向かった。

夢に現れた者から最初に指定された場所は、イギリスのグラストンベリーと呼ばれる町であった。

12時間ほど掛かり、指定された町についた。

「この場所にまず向かうように言われたが……中々にいい町の雰囲気だな」
邪魔にならぬよう道の端に避け、町並みを見ながらそう溢す。

道行く人々は笑顔で楽しそうに話し歩き、商店や出店では活気よく客の呼び込みを行っている。

出店の商品を買って食してみたところ、自分の知識ではメシマズ大国と認識してたがそんなに悪くはないと思った。

そんなことを考えながら神器の影響で足りないため追加で買った10人前以上のものを食べながら周りを見渡していると物珍しそうに見られた。

20分ほどで食べ切ることには人だかりができており、すごい拍手され、握手を求められたり、写真を撮られたりした

人だかりから抜け、グラストンベリー修道院廃墟へ入った途端、霧が満ち始めるが、周りを行きかう人々は認識していないようだった。

『突然のことで取り乱すと思っていました、冷静ですね』

霧が晴れるとともに人々は消え、代わりに色褪せた風景と騎士のような装いの者が2人立っていた。1人は白銀の鎧であり、もう1人は紫の鎧を纏っていた。

『この程度で取り乱しては、選抜に相応しくない』

「選抜とはなんなんだ？夢でこの地に向かえとしか言われていないが」

『選抜とは、とある物を持つに値するかを確かめる物です。』

『そして、我々はその第一関門というモノだ』

騎士の2人からそう告げられ、匠は少し考えた上で

「夢でこの地に呼ばれた意味は分かっていたが、選抜とは何をするんだ？そして、選抜ということとは数人候補がいるということだろう」

すると白の騎士が驚いた表情を浮かべ、紫の騎士は関心を示した

『そこに気づくとはあの胡散臭い人でも見る目だけは確かなのですね』

『あの胡散臭い魔導士にそんな長所があるとは信じられんが……それは置いておき』
『君の第一関門としての課題は我々との戦闘になり、それを以って武力方面でのもつに値するかを確かめる事になる』

それに匠は理解したと無言でうなずき、3mほど後ろへ飛退きながら外套を纏い双剣を構える。

この行動に騎士2人は武器である剣に手をかけ

『第一関門の番は太陽の騎士ガウエイン・湖の騎士ランスロットが相手をする』

10話

ガウエイン・ランスロットの宣言と同時に戦闘が開始され、2人の騎士が迫ってくる匠もそれに応え、振るわれる両手剣を双剣でいなし、振るい避けられ、後ろを取り取られ、

幾度となく2人と渡り合った。

だが、死してもやはり騎士として戦いに経験のあるガウエインらとは違い、少しずつ圧されていく匠であった。

「…死してもやはり騎士は違うか」

『我らは薄れていたとしても神秘のある時代であったあの頃を生きてきた』

『簡単には後れを取るような無様は晒さない』

確かに2人は匠の攻撃をほぼ最低限の動きで避けており、逆に匠は双剣で何とかズラしているため消費が多いのである

『では、まだまだ行きますよ』

『死なぬよう気張ってこい！』

.....

再開され、もはや時間がどれだけ経ったか解らないほど長い時間戦い続け、遂に決着の時が来る

『これ程長く我々の前で立ち続けた者はそんなにも多くありませんよ』

『だが、この最後の我らの宝具を受け、それでも立っていられるかな？』

『この剣は太陽の映し身。もう一振りの星の聖剣、あらゆる不浄を清める焔の陽炎』

『最果てに至れ。限界を越えよ。彼方の王よ、この光を御覧あれ！』

『行くぞ!!』

アロンダイト・オーバード
縛鎖全断・過重湖光

2つの宝具を受け、匠のいた場所には土煙が広がる

ガウエインらはこれで終わったのだと思い、剣を鞘に納めようとした途端

ヴオアアアアアアアッ!!!!

その叫びとともに先ほどまで外套を纏っていた匠が鎧をまとった姿で現れた。

しかし、その様子はおかしく、暴走しているように見えた

「我らの宝具を受けて、まだ立っているとはー」

「だが、そのせいで生命の危機を感じた意識のない彼の本能で神器が疑似覚醒したよう
だ」

剣を構え直した2人に暴走した匠が襲い掛かる

双剣を構えたと思えば太刀へ変わり、鍔迫り合いをすれば双剣に・・・

連撃から一撃に、近距離から遠距離に、次々に変わっていく武器と戦い方に先ほども
では

全く違う動きであり、本当に暴走しているのかというほど動きに無駄がない

「彼は本当に暴走しているのか!?!」

「…もしま、あり得ぬとは思いますが、魂の記憶がああ動きをさせているのか」

「神器に囚われた魂の記憶というものか……あり得るのか？ そのようなことが」

「無いとは言い切れない……あの部類の神器は宿主が死した後、その魂を神器内に取り込むようだからな」

二人がそのような会話をしていると、当然暴走していた匠が

「……ウル……サイ……ダマレ……オレニサシズ……スルナ……」

武器を落とし、頭を抱えだす匠

「……オレ……ノ……戦いにいらぬ手出しをするなあああああ」

鎧の姿のままだが、正気を取り戻した様子匠、それを察する騎士二人

「どうやら、ここからが君本来の価値を見ることができるようだな」

「……宝具とかいうのを受けた後、意識を失ってたら意味の分からないことをほざく先任らを鎮圧してきたからな」

ここからは頭がすつきりして戦わせてもらう」

互いに武器を構え、先ほどよりさらに緊迫した空気が周りに広がる

双方、時間はもう掛けないという意思があるのか、次で終わらせるといふ目をしたまま相手の出方をうかがっている

そして、その火蓋が切られ決着がつくのは一瞬であった

ガウエインとランロットが振るつた左右からの剣を双剣でズラし、そのまま2人の

脇腹に一閃を入れた

「暴走したときはこの者は違うと思っただが」

「…いやはや自分で暴走を止めここまでされるとはな」

二人は苦笑しながら、匠のほうを向きながら

『合格だ』

そう宣言した